

## トニ・モリスンの*God Help the Child*再読

### — 「驚くべき」身体と歴史の修復<sup>1</sup> —

小 泉 泉

はじめに

2015年に出版され、トニ・モリスン (Toni Morrison, 1931-2019) の最後の作品となった『神よ、あの子を守りたまえ』<sup>2</sup> (*God Help the Child*) は、これまでモリスンが作品のテーマとしてきた人種、ジェンダー、トラウマ、母娘の関係、歴史の問題などを包括する作品としてさまざまな評価を得てきた作品である。中でも特に、モリスンの第一作目『青い眼がほしい』<sup>3</sup> (*The Bluest Eye*, 1970) の現代版としてその共振性も論じられてきた<sup>4</sup>。しかし、その批評的受容において、『青い眼がほしい』が、デヴィッド・ユーリン (David L. Ulin) の言葉で、「安易な解決を阻む深い問題」(challenging)を提示する作品だとするならば、『神よ、あの子を守りたまえ』は、おおむね、その陳腐さと簡潔さという点で、厳しい評価を得てきたようにみえる<sup>5</sup>。

第一作目の『青い眼がほしい』から第十一作目となる『神よ、あの子を守りたまえ』までの作品を通して、一貫してモリスンが関心を示してきたのは、ヴァレリー・スミス (Valerie Smith) が述べているように、「アメリカ文化の炭鉱のカナリア」(99) として最も社会の危険にさらされやすい黒人の子どもたち、中でも少女たち、といえる。『神よ、あの子を守りたまえ』という作品の題名そのものが示唆するように、またスーザン・メイベリー (Susan N. Mayberry) が述べているように、この作品において、モリスンは、この半世紀余りにわたるアメリカの歴史の中で、肌の色に基づく人種差別に起因する精神的・肉体的・性的児童虐待に晒される黒人の子どもたちの保護がいかに改善されてきたか、否かを検証しているかのように見える (228)。

『神よ、あの子を守りたまえ』では、成人したプライドを取り囲むほとんど全ての登場人物が子ども時代に児童虐待を経験した大人たちであり、中心となる

ブライドにおいて、過去に受けた虐待のトラウマに立ち向かう心理的過程が、幼児期の身体に後退するという肉体的変化と並行して示されている。本稿では、これまで単なる非現実的な「驚くべき」出来事として批判的に指摘されてきたブライドの身体の変化が、作品においていかなる意義を包含しているのかについて、魔術的リアリズムの手法的観点と、ホーテンス・スピラーズ（Hortense J. Spillers）の著名な論文“Mama’s Baby, Papa’s Maybe: An American Grammar Book”に照らしながら検証していく。

## 1. 「カラー・フェティッシュ」

『「他者」の起源』<sup>6</sup>（*The Origin of Others*, 2017）の中で、モリスンは、アメリカの文化的メカニズムが、肌の色に対する病的な執着（“Color Fetish”）から成るものとして、「安っぽい人種主義を骨抜きにし、奴隷制の名残そのものであるおきまりの、安易に手に入るカラー・フェティッシュを無効にし、信頼できないものとする」というアフリカ系アメリカ人作家としての強い決意を示している（53）<sup>7</sup>。モリスン自身が述べているように、『神よ、あの子を守りたまえ』は、こうした作者の人種的指標を無視して書かれた策略的な作品の一つに数えられるものである（49-51）。この作品は、1990年代のアメリカ社会を背景とし、経済的・社会的地位を手にした「ブルー・ブラック」という肌色を持つ主人公ブライド（ルーラ・アン）の成功を物語の起点としている。彼女は、肌の黒さに起因する幼少期の精神的な傷を抱えながらも、「完璧に統制され、世慣れた、素晴らしい成功をおさめた働く女性のうわべ」（134）を身にまとう<sup>8</sup>、ジャガーを乗り回す都会の実業家（化粧品会社のリージョナル・マネージャー）であり、物質主義的な利潤追求と達成に基づく「黒さ」の現代的な概念を包容する、いわば「ニュー・ブラック」<sup>9</sup>として描写されている（Akhtar 1）。しかし『青い眼がほしい』以降、全ての作品を通してアメリカ社会の「カラー・フェティッシュ」という問題に鋭い視線を投げかけてきたモリスンが、このような黒さを克服したように見えるブライドの成功を安易に賛美することはない。皮肉にも、彼女の成功を象徴する高価で華美な「うわべ」が傷つけられることにより、ブライドの成功は崩壊していくのである。この点において、『神よ、あの子を守りた

まえ』は、モリスンが貫いてきたテーマの原点ともいえる固定化された「黒さ」と美醜の概念、それに伴われる「内在化された人種差別」(Ulin)の構造を改めて現代に問いただす作品とすることができる。

作中でプライドが自身の誇る成熟した身体が失われていることに最初に気づくのは、十五年前、幼児への猥褻行為の嫌疑で刑務所に入れられた、当時の小学校教師ソフィアが仮釈放されることを知り、面会に訪れるときである。彼女はまず、陰毛がなくなっていることに気づくのだが、やがて耳たぶのピアスの穴が塞がり、子ども用のズボンがちょうどよくなるほどに身体は縮み、胸は膨らみがなくなって平らになり、生理も途絶えてしまう。法廷に立った当時八歳の小学生だったルーラ・アン(プライド)は、母の愛情一手の感觸一欲しさに嘘の証言をし、ソフィアを二十五年の刑に処する。ルーラ・アンの肌の黒さは、薄い肌色を持つ母スウィートネスに言わせれば「常に背負わなければならない十字架」(7)であり、その理由で、スウィートネスは娘に触れることを拒み続けるのである。ソフィアが仮釈放される日、ジャガーに乗り、ルイ・ヴィトンのバッグに現金五千ドルとギフト航空券、自社の化粧品サンプルを入れて面会に訪れたプライドは、ソフィアから殴打の仕打ちを受ける。それは、プライドの「子どもっぽい発想へのお返し」(風呂本225)に他ならないのだが、傷が回復していく中で彼女が回想するのは、法廷に立った当時の「最悪の」(29)記憶である。

だから私は時間をかけた。私の手は、腕がまっすぐになるまで拳を握っていた。それから私は人差し指を出した。バーン！…私はスウィートネスをちらりと見た。彼女は、私がこれまでに見たことがないような笑みを浮かべていた一口も目も。…私たちが裁判所の階段を降りていく時、彼女は、私の手を握っていた。私の手を。彼女がこれまでしたことがないことだ。私は嬉しいのと同じくらい驚いた。なぜなら彼女がいつだって私に触れたくないと思っていたことを私は知っていたからだ。(31)

プライドが身体に傷を負うことで呼び起こされたのは、幼少期に母から向けられた嫌悪、「最悪の」過去である。作中では、この傷による綻びをきっかけ

として、プライドの完璧な身体の幼少化が進行していく。高村峰生がプライドの身体の変化を「身体の内埋め込まれた彼女の内のもう一つの時間からの呼び声」（117）と位置づけるように、プライドは、ソフィアとの面会を境に、かつての虚偽の証言経験によるトラウマ、風呂本惇子の言葉で、「しがみついて動きがとれなく」になっていた「古傷」（229）、すなわち、母娘の関係に基づく不安や恐怖と向き合うことになる。プライドは、のちに、自身の身体の変化は、「単に彼が去った後にはではなく、彼が去ったから始まったのだ」（93-94）と認識するが、彼女の成熟した身体が幼児期に後退するといった現象は、過去と対峙することに並行して「黒こそが新しい」（33）を標榜する彼女の「うわべ」による「うわべ」だけの成功が脆くも崩れる運命であることを意味している。

プライドの身体が幼少期のそれに後退するという「驚異的現実」は、批評家たちによって魔術的リアリズムの手法の援用を指摘されてきたものである。この手法が、モリスン作品における特徴の一つとして取り上げられる一方で、ユエリンは、『神よ、あの子を守りたまえ』は、典型的な出来事の語りにすぎず、むさ苦しく複雑な経験に触れることがない」とし、「その深さの欠如を埋め合わせるために魔術的リアリズムの緩やかな側面を利用している」のだと、厳しい評価をくだしている<sup>10</sup>。しかし、モリスンが『神よ、あの子を守りたまえ』において、この手法を用いる意義の一つは、従来のテーマであって来た肌の色に起因するアメリカ社会内部の差別を再びその根底のテーマとして取り上げながら、歴史的指標の修復と再構築、すなわち、その流動性を提示することにあると考えられる。よく知られるように、魔術的リアリズムは、1960年代から70年代にかけてラテンアメリカでブームを巻き起こしたことから、その地域的な範疇においてしばしば考察されてきた手法である。その一方で、フェリシティ・ジイ（Felicity Gee）は、魔術的リアリズムは、世界中にそのルーツを広げながら学際的にさまざま分野で使用され、トランスナショナルでディアスポラ的な経験を語る、追放者、異邦人のディスコースとして、追放された者たちの不安定な内面の恐怖を捉えた作品であると述べている（ix）。それゆえに、モリスンは、この手法を『神よ、あの子を救いたまえ』に用いることにより、エイミー・カプラン（Amy Kaplan）が「内部で分断されたアメリカ」（52）と明言する、「カラー・フェティッシュ」により分断されたアメリカ内部の現実、自国の人々を「内部

で外国人」(6)にしてきたアメリカ社会のメカニズムとそこに生きる人々の「内面の恐怖」の様相を、強調的に現代社会に映し出しているのだといえる。

## 2. 「驚くべき」身体と「捕獲された」身体

ホーテンス・スピラーズは、“Mama’s Baby, Papa’s Maybe: An American Grammar Book” (1987) において、黒人女性の身体を「刻印された」(marked)「分裂した主体」(split subject) であるとし、冒頭で、彼女らに投与されてきた符号—“Peaches” and “Brown Sugar,” “Sapphire” and “Earth Mother,” “Aunty,” “Granny,” God’s “Holy Fool,” and a “Miss Ebony First,” or “Black Woman at the Podium” (65)—を列挙している。スピラーズは、これらのコード化された符号が、黒人女性のアイデンティティとしてアメリカにおいて国家的に利用されてきたのだと言い、これらの符号には「取り払うことが決して容易ではない架空の先入観がどっしりと詰め込まれている」のだと述べている。二十世紀はこの「符号」を深く暴きだす世紀だという(65)。1990年代の資本主義社会を背景とした『神よ、あの子を守りたまえ』において、黒い肌の「うわべ」を取り繕うブライドの身体は、スピラーズのいう「コード」と同じく「賦与と剥奪」(investment and privations)が行われる場であり(65)、彼女の身体が過去に立ち戻ることは、黒い肌の色の先にある真の主体の本質を探ることを可能にする。ブライドが、「あなたの黄金時代のための」(10)を掲げる化粧品会社のリージョナル・マネージャーであることは、彼女の“make-up”された「うわべ」の成功を象徴するものである。ブライドは、自称「トータル・パーソン」デザイナー、ジェリの主張に従い(彼女の部署名も彼が彼女に言った言葉「ユー・ガール」(You, Girl)から付けられた)、化粧や宝石類も付けず、黒い肌を真っ白な衣装のみで包むことによって輝きを纏い、決して子どもの頃に経験したような「微かに嫌悪感を示す反応」(34)ではない評価を得ることで成功を手にする。

真実であろうとなかろうと、これが私を作り、作り直した。私は、違う動き方をし始めた—気取った風でも、通路で骨盤を突き出して急ぎ足で歩く風でもなく—一大股で、ゆっくりと、焦点を定めて。男たちが飛びつい

てくると、私は捕まるままにさせた。とにかく、しばらくの間、私の性生活がダイエット・コークー栄養はないが、人を騙す甘さがある—のようになるまでは。…私のボーイフレンドは、みんな型にはまった人たちだった—俳優志望、ラッパー、プロのアスリート、お小遣いのように私の股か給料を待っている遊び人たち。その他はすでに成功した男たちで、彼らの武勇に対するメダル、静かに光輝く証拠のように私を扱った。(36)

ブライドの成功は、過去の傷ついた主体を覆い隠す「白」によるものであるが、黒と白のコントラストに導かれる「文明社会の中で最もホットな商品」(36)が「人を騙す甘さ」を含むダイエットコークと同類の価値に過ぎないものであることは、ブライド自身が認識する通りである。「白さ」に守られたブライドの身体の輝きは、言い換えれば、スピラーズが提示した黒人女性の否定的アイデンティティのコードが、現代の消費社会の中で塗り替えられたものであるが、彼女の主体的な自己を制御し剥奪さえるものであることには変わらない。

このように、ブライドの「静かに光輝く証拠」としての身体は、スピラーズが論じる「捕獲された身体」(the captive body)をも想起させるものである。スピラーズは、「捕獲された身体」は自らの意志から切り離され、結果として性差を失い、巧妙な文化的・政治的な手段として使われる存在だと述べる。スピラーズによれば、その身体は、抑制できない自己破滅的な官能性の源となるとともに、捕獲者の物としての存在となる。そしてそのセクシュアリティは、「他者」の肉体的・生物学的な欲求の表出の場であって、身体は完全に無力な状態になるのだという(67)。しかし『神よ、あの子を守りたまえ』において、ブライドの官能的な「輝き」の露出は、このようなスピラーズの論点の先に見る現代的・「挑戦的な」(Akhtar 2)黒人女性の身体描写を提示するものともなっている。シャイン・リー (Shayne Lee) は、*Erotic Revolutionaries: Black Women, Sexuality, and Popular Culture*(2010)の中で黒人女性が官能性(セクシュアリティ)の表出をいかに抑制されてきたかについて検証し、スピラーズの論点を確証づけているが、現代においても黒人女性たちがアメリカ社会に浸透する「コード」の否定的なイメージに抑圧され、性的な自律を制御されていることは否めない。それゆえに、ブライドの性的魅力とセクシュアリティの賛美—それが一時的

な成功に過ぎないとしても—は、コード化されてきた黒人女性像に「挑戦的な」視座を投げかけるものとなり、モリスンは、プライドのセクシュアリティを通して、そのコードを打ちけす「隠された力の根源」(Akhtar 2)<sup>11</sup>を持つ「ニュー・ブラック」像を創出しているということができる。

『神よ、あの子を救いたまえ』においてモリスンが注視しているようにみえるのは、このような黒人女性たちの肌の色と身体における抑圧と制御が幼児期から行われているという点である。『青い眼がほしい』においては、「肉体の美しさ」を教え込まれたポーリーンにとって、産まれてきたピコーラは「黒い毛の球」(124)・「子犬と、死にかけた人間との中間物」(126)に過ぎない存在であったが、ブルー・ブラックの肌色を持つルーラ・アンは、誕生と同時に母スウィートネスの「恥」となる(4)。作品においてルーラ・アンが受ける虐待と、法廷での虚偽の証言は、黒人の少女が、文字通り、「あらゆる社会の病理の矢面に」立たされていること(Umrigar)、それどころか、その病理を背負って生まれてくる—犠牲者になる—運命であることを如実に示すものである。モリスンの作品において、黒人の少女たちばかりか、子どもたちはみな(白人の少女レインやアダム、家主リーの性的暴行を受けた白人の少年のように)、プライドとブッカーが信じているような「悪や病から免れ、誘拐、殴打、強姦、人種差別、侮辱、苦悩、自己嫌悪、放棄から護られている」(175)という概念から切り離されている。その行く末にルーラ・アンが犯した罪は、「過ちはなく、全てが善で、怒りもない」(175)という子どもに対する無垢なイメージが全くの幻想にすぎないこと、言い換えれば、「アメリカの文法書」が生産する病理がそれを幻想に書き換えてしまうこと、さらにはこの書き換えの連鎖がなすすべもなく現代まで繰り返されていることを示すものに他ならない。

### 3. 歴史の修復

プライドの成功は、ソフィアの暴力的な仕返しと、ブッカーを探しにいく途中に通過する森の中での衝突事故によって、文字通り、傷つけられていく。プライドは、この森の中で「本物の生活」(a real life)を送る白人のカップル、スティーヴとエヴリンに保護され手当てを受ける。またプライドと同様に、母親の虐待

からこのカップルに保護されている白人の少女レインに対しては「女子学生の親密さのような、驚くほど羨望を感じない仲間意識」（103）を感じるようになる<sup>12</sup>。彼らが「本物の生活」を送る自然は、プライドの「うわべ」の物質主義的な成功を象徴する文明社会と対比をなすものであるが、この二つの世界観の衝突は、魔術的リアリズムにみられる重要な側面を示すものとなっている。カラ・ウォーカー（Kara Walker）は、森の中へ迷い込む旅という設定をもつ『神よ、あの子を守りたまえ』について、「グリム童話を彷彿させるそっけない現代的なお伽話」と評しつつ、モリスンの作品における自然は「出来事が躍動的に急展開し、テーマに豊かさや深さを与える手段の一つ」であることも認めている。魔術的リアリズムの代表作といえるガブリエル・ガルシア＝マルケス（Gabriel García Márquez, 1928-2014）の『百年の孤独』（*Cien años de soledad*, 1967）では、周縁におかれたマコンド共同体を崩壊へと導く主たる要因は、外界の近代的世界、文明との衝突だと考えられる。ラテンアメリカ文学者寺尾隆吉によれば、マコンド共同体は、文明の流入と共に世界に取り残され、その世界観を頑なに守り抜くことによって、「孤独」と共に崩壊の一途を辿っていくのだという（108-113）。『百年の孤独』は、この崩壊とともに、物語に挿入されたコロンビアの内乱やストライキ、大虐殺などの事件がやがて人々の記憶から消えていき、最終的には、これらの出来事は、羊皮紙に記された空想世界の中に残されているというメタフィクショナルな語り構造をとるものとなっている。しかし、寺尾が論じているように、現実世界における作者ガルシア＝マルケスのこの作品における功績は、「この架空の物語を『百年の孤独』として書き直す」ことであり、ラテンアメリカの社会的現実と結びつけること（113）、また、人々の記憶からばかりでなく、公的歴史からもみ消されていく事件・歴史を回復し、さらには「現実世界で起こる想像を絶する事件を真に現実のものとして受け入れることを可能にする」（116）視座を提供することだということができるのである。

『神よ、あの子を守りたまえ』において、プライドが「本物の生活」に遭遇する自然の中での二つの世界観の衝突は、プライドに肉体とともに精神的な回復と成長という物語の転機をもたらす現場となる。森の中でプライドが彼らと共有する、テレビばかりか「洗濯機も冷蔵庫も浴室もお金もない」（91）文明



を逸した「本物の生活」は、彼女の「うわべ」を剥がし「身体の内に埋め込まれた」時間と古傷を癒していく。シャーリー・ステイブ (Shirley Stave) は、プライドの表面の黒い肌の裂け目と傷は、「その下に存在するものを露わにし、その分断的な二元性を生み出している表面の融解と、自己の統合の始まりとして機能する」ものだと述べ、身体が幼少期に立ち戻ることで、プライドは「豪華だが空虚な生活」を捨て新たな生活を歩み始めるのだという (16)。また、事故によりほとんど動けないままソファに横たわるプライドの姿は棺に横たわる姿を想起させるものであり、ステイブは、ここに死と生まれ変わりのイメージが完成していると指摘している (18)。プライドの回復のきっかけとなるのは、風呂本も指摘しているように、ステイーヴとエヴリンのカップルの「無償」の世話であり、プライドは、彼らの手当てを通して「人の人に対する気遣いというものを心身に吸収」したといえる (227)<sup>13</sup>。プライドは、初め、彼らの無償の世話を理解できないばかりか、彼らが彼女の身の上や、幼児のような身体への変化にさえ関心を示したり尋ねようともしない気遣いに困惑さえ覚える。しかしそれは、のちのプライドの「生まれ変わり」を物語るものである。

彼らは彼女がどこからきたのか、またどこへ行こうとしているのか、尋ねなかった。単に彼女の面倒を見、食事を与え、彼女の車を修理に出すように取り計らってくれるだけだった。彼女にとって、彼らがしてくれるような気遣いを理解するのはあまりに難しく、あまりに奇妙に思えた。無償で、彼女が誰であろうと、どこへ行こうとしていようと、非難もせず、ふとした関心さえ示さない。彼女は時々、彼らが何か企んでいるのだろうかと思ったりもした。何か悪いことを。(90)

やがてプライドは、ステイーヴとエヴリンから利他的に行動することを学び、欠如していた愛を吸収することにより、通りがかりの少年の散弾銃から身を挺してレインを守ることもできるようになる。さらに、それまで「個人的な生活に関心を抱いていなかった」(133) ブッカーを一彼の幼少期の深い傷を一理解できるようにもなっている。プライドが身体の傷と引き換えに利他的な心を手に入れ、その愛情を他者に施すことができるようになることは、社会の病理

の犠牲となった子どもたちの罪が、たとえその一部であるとしても、償われたことを意味するとともに、救いとなるものである。モリスンが『「他者」の起源』の中で述べているように、他者を理解することは、他ならぬ、「切望しながらも掴み損ねていた」自己の側面を理解することなのである（38）。プライドの取り戻された身体の成熟は、「うわべ」を捨てた彼女の自己の成長と統合、何よりも自己の理解を示唆するものである<sup>14</sup>。

しかし忘れてはならないことは、ステイーヴやエヴリンがプライドの事情にも境遇にも無関心を装う気遣いは、一方で、大人たちの冷淡な無関心さに置き換えることができることである。決してあり得ないこととは言えない大人たちの無関心さは、アメリカ社会において児童虐待が認識されないまま隠蔽されてきた歴史を仄めかすものとも考えられる。魔術的リアリズム的な観点から捉えるならば、プライドの過去に遡った幼児期の身体に目を向けることは、改善がなされぬまま、もみ消されていく児童虐待という社会的重大事件—「現実世界で起こる想像を絶する事件」—を現実のものとして受け入れ、暴く視座を認識することといえるのである<sup>15</sup>。

## おわりに

『神よ、あの子を守りたまえ』の語りは、初期の作品と比較すると「柔和」（*svelte*）になり（Elkin）、一見、和解と融和へと読者を導いていくかのように見える。スリティ・ウムリガル（Thrity Umrigar）が指摘するように、『神よ、あの子を守りたまえ』では、従来のモリスン作品にみられた「読者を惑わす入念な加工」は消え、一見簡潔で楽観的にさえみえる物語の展開は、さまざまな批評も浴びてきた。しかし、アメリカ社会、あるいはそのメカニズムが抱える最も根源的な問題の深さに向けられた切迫したモリスンの眼差しは揺るぎのないものである。周縁の語りともいえる魔術的リアリズムの手法を用いて、プライドの身体の変容が語るのは、静かでありながら妥協を許さない作者の怒りに他ならない。「私のせいでない」で始まる母スウィートネスの独白は、アメリカ社会の病理に対する大人たちの責任の回避を象徴的に示す言葉であり、後悔はしても、悔い改める大人たちの言葉が発せられることはない。ウムリガルの

言葉で、飾らずに「物語そのもの」を語ろうとする削ぎ落とされた語りの中で、モリスンは決して彼らを責めることがないようにみえるが、娘の黒い肌を恥じ、決して「お母さん」や「ママ」とも呼ばせない（代わりに「スウィートネス」と呼ばせる）スウィートネスをはじめ、幼い娘を性商売の道具に使い、その一人に性的虐待を受ける娘を庇うどころか追い出してしまうレインの母親、何人もの男性と結婚し何人もの子どもを産みながら、「一人の子どもも十二歳以上になるまで育てる機会をもたなかった」（159）クイーンのような大人たちに向けられた作者の視線は、ウォーカーの言葉で、「用心深い嫌悪感」（a cautious disgust）を漂わせる突き放したような冷たさをも感じられるものでもある<sup>16</sup>。物語の結末において、プライドの妊娠に示唆されている身体の統一と融和に、一見、解決への糸口が見出されるようにみえるが、そのトーンの冷淡さは、安易な共感と同情を寄せることができない、分断した、複雑なアメリカ社会のメカニズムの「現実」をより深刻に、冷静に受け止める作者の姿勢を伝えている。

プライドの肌の先に透けて見える統合的な主体は、心身に吸収した「他者」への気遣いと理解—ある意味では、償い—を通して得られたものであるが、それは、2012年にモリスンがハーバード大学で行った「善良さ—利他主義と想像の文学」（“Goodness: Altruism and the Literary Imagination”）の中で語られた言葉を思い出させるものである。

時が経ち、この四十年の間、私はますます善良さという行為が言葉を生み出すことを確かめることに（それがどんなにさりげないものであろうと、慎重なものであろうと、あるいは、... 祝福されたものであろうと）力を注ぐようになりました。... 善良さの表現は、私の作品において、決して、瑣末であったり付随的なことはありません。実際、私は、それらの表現を通して、人生を変えるような特質と、語りに埋め込まれた道徳的な問題を照らし出したいと思っています。....

善良さに、それ自身の語りの力を与えることで悪をなくすことはできません。しかし、そうすることは、私自身の善良さの理解—自己認識—を示す機会を与えてくれます。私にとって、満足できるよい結末とは、主人公が、極めて重要で道徳的に深い何かを獲得することであり、それは彼ら

が物語の初めには知らなかった何かなのです。（Carrasco 18）

この作者の言葉の通り、プライドは、黒い肌の先に自己を認識する深い「知」—プライドの言葉で、「善そのもの、事物を超えた愛」（92）—を得ることができたようにみえる。物語の最後に置かれた「神よ、あの子を守りたまえ」という母スウィートネスの言葉は、分断されたアメリカ社会を融和へ導くレジリエンス、すなわち、「善良さ」と、救いに対する作者の祈りを静かでありながら強い調子で響かせるものである。

## 注

- 1 本稿は、第61回アメリカ文学会全国大会（2022年10月8日・9日）におけるワークショップ「Toni Morrison再読—分断の時代のレジリエンス」での発表原稿を加筆・修正したものである。また、「驚くべき」という語については、魔術的リアリズムの理念を打ち立てたキューバの作家アレホ・カルペンティエル（Alejo Carpentier）の言葉“lo real maravilloso”（the marvelous real）を念頭において使用している。
- 2 大社淑子訳。
- 3 大社淑子訳。
- 4 例えば、スーザン・メイベリー（Susan N. Mayberry）は*The Critical Life of Toni Morrison*（Camden House）の*The God Help the Child*の項目において、*The Bluest Eye*に依拠しつつ解説を加えている（228-230）。
- 5 ロン・チャールズ（Ron Charles）もまた、『神よ、あの子を守りたまえ』において『青い眼がほしい』の力強さはほんの微かにしかみられない（a faint echo）と述べている。
- 6 荒このみ訳。
- 7 以降、本書からの訳は、荒このみ訳『「他者」の起源』（集英社）を適宜参考にした拙訳を使用する。
- 8 以降、本文からの引用は、大社淑子訳『神よ、あの子を守りたまえ』（早川書房）を適宜参照した拙訳を使用し、*God Help the Child*（Vintage）からのページのみを記す。
- 9 アクタールは、*Toni Morrison and the New Black*（Routledge）の中で「ニュー・ブラック」の発展を、ポスト公民権からポスト・ソウル、ポスト・ブラックへの「黒さ」の進化の過程として論じている。
- 10 同じくチャールズも、『神よ、あの子を守りたまえ』における魔術的リアリズム的な手法について、その描写は「不必要に説明された、不細工な（clunky）な象徴的表現」と評している。
- 11 アクタールは、この点について、リーの議論を後ろ盾としつつ論じており、プライドは、新しい世代の黒人女性たちに対し、性的なエンパワメントを促す存在であると説明している（1-2）。
- 12 鶴殿えりかは、モリスンの多くの小説において、黒人女性と白人女性の友情が描かれてきたことを指摘している。彼女たちは、「人種や境遇の違いを超えて助けあう

女性たち」であり、『神よ、あの子を守りたまえ』においても、「自己の利益を顧みず、相手に与えることを惜しまない女同士の友情のテーマ」が描かれていると述べている (105-106)。

- 13 この点について、ステイブもまた、ステイーヴとエヴリンの行為は、ルーラ・アンが幼少期に必要としていた親の代行的な役割であることを説明している (18)。
- 14 モリスンはまた、同じく『「他者」の起源』の中で、『神よ、あの子を守りたまえ』において、「肌の色(color)は、呪いでも祝福でもあり、ハンマーでも黄金の環でもある。もっともどちらも主人公が思いやりのある人間になる役には立っていないのだけれど。私欲を持たずに誰かのために世話することだけが真の成熟を成し遂げることができるのだらう」と述べている (51)。
- 15 『神よ、あの子を守りたまえ』において、もう一つの「隠蔽された」事件は、白人の家主が少年に犯した性的虐待を六歳のルーラ・アンが目撃したことである。ブライドは後に、「法廷に立ったとき、私の人差し指が実際に差していたのは家主だったとしたらどうだろう？」(56)と告白的に回想しているが、六歳の少女は、部屋を追い出されるのを恐れた母親に口止めされていたのである。
- 16 ウォーカーは、『神よ、あの子を守りたまえ』において、モリスンがこのように児童虐待を語るのに対し、十一歳の少女が父親に強姦される『青い眼がほしい』では、「恐ろしいほどの親密さ」(terrifying closeness)でそれが語られていると述べている。また、鵜殿は、「スウィートネスのように、偏見に満ちた考えや愛のない振舞いによって子どもを不幸にしてしまう母親」の登場が、これまでのモリスンの全ての小説において共通していると論じている (101)。

## 引用文献

- Akhtar, Jaleel. *Toni Morrison and The New Black: Reading God Help the Child*. Routledge, 2019.
- Carrasco, David, Stephanie Paulsell, and Mara Willard. *Toni Morrison: Goodness and the Literary Imagination*. U of Virginia P., 2019.
- Charles, Ron. "Toni Morrison's Familiar, Flawed 'God Help the Child.'" *Washington Post*, April 14, 2015. [www.washingtonpost.com/entertainment/books/toni-morrison-s-familiar-flawed-god-help-the-child/2015/04/14/6cde0cfe-dec6-11e4-a500-1c5bb1d8ff6a\\_story.html](http://www.washingtonpost.com/entertainment/books/toni-morrison-s-familiar-flawed-god-help-the-child/2015/04/14/6cde0cfe-dec6-11e4-a500-1c5bb1d8ff6a_story.html).
- Elkin, Susan. "God Help the Child by Toni Morrison." *Independent*, 18 Apr. 2015. [www.independent.co.uk/arts-entertainment/books/reviews/god-help-the-child-by-toni-morrison-book-review-the-tyranny-of-memory-can-make-a-destructive-adversary-10182633.html](http://www.independent.co.uk/arts-entertainment/books/reviews/god-help-the-child-by-toni-morrison-book-review-the-tyranny-of-memory-can-make-a-destructive-adversary-10182633.html).
- Gee, Felicity. *Magic Realism, World Cinema, and the Avant-Garde*. Routledge, 2021.
- Kaplan, Amy. *The Anarchy of Empire: In the Making of U.S. Culture*. Harvard UP., 2002.
- Lee, Shayne. *Erotic Revolutionaries: Black Women, Sexuality, and Popular Culture*. Hamilton Books, 2010.
- Mayberry, Susan Neal. *The Critical Life of Toni Morrison*. Camden House, 2021.
- Morrison, Toni. *The Bluest Eye*. 1970. Plume, 1994.
- \_\_\_\_\_. *God Help the Child*. Vintage, 2015.
- \_\_\_\_\_. *The Origin of Others*. Harvard UP., 2017.
- Smith, Valerie. *Toni Morrison: Writing the Moral Imagination*. Wiley Blackwell, 2012.
- Spillers, Hortense. "Mama's Baby, Papa's Maybe: An American Grammar Book." *Diacritics: A Review of Contemporary Criticism*, vol. 17 (2), 1987, pp. 65-81.
- Stave, Shirley A. "Skin Deep: Identity and Trauma in *God Help the Child*." *New Critical Essays on Toni Morrison's God Help the Child: Race, Culture, and History*, edited by Alice Knox Eaton, et al. UP of Mississippi, 2020, pp. 5-29.
- Ulin, David L. "The Magic Is Missing in Toni Morrison's *God Help the Child*." *Los Angeles Times*, 23 Apr. 2015. [www.baltimoresun.com/la-ca-jc-toni-morrison-20150426-story.html](http://www.baltimoresun.com/la-ca-jc-toni-morrison-20150426-story.html).
- Umrigar, Thrity. "Book Review: 'God Help the Child' by Toni Morrison." *The Boston Globe*, 22 Apr. 2015. [www.bostonglobe.com/arts/books/2015/04/18/book-review-god-help-child-Toni-morrison/MGA5UlhUJ9vG7dseNPnHGO/story.html](http://www.bostonglobe.com/arts/books/2015/04/18/book-review-god-help-child-Toni-morrison/MGA5UlhUJ9vG7dseNPnHGO/story.html).
- Walker, Kara. "Toni Morrison's 'God Help the Child.'" *The New York Times*, 13 Apr. 2015.
- 鶴殿えりか「Toni Morrisonの*God Help the Child*における護られざる者」『英文学研究』支部統合号第13巻（2021）、99-107頁。
- 高村峰生「深い皮膚—『神よ、あの子を守りたまえ』における商品化された「黒さ」と触覚的身体」『ユリイカ』第51号17巻（2019）、113-122頁。
- 寺尾隆吉『魔術的リアリズム—二〇世紀のラテンアメリカ小説』水声社、2012年。
- 風呂本惇子「連鎖を解く力—『神よ、あの子を守りたまえ』における「母代わり」の意味」『新たななるトニ・モリスン—その小説世界を拓く』風呂本惇子、松本昇他編、金星堂、2017年、218-235頁。
- モリスン、トニ『神よ、あの子を守りたまえ』大社淑子訳、早川書房、2016年。
- \_\_\_\_\_. 『「他者」の起源—ノーベル賞作家のハーバード連続講演録』荒このみ訳、集英社新書、2019年。